

OISCA

— 人と育む、地球といきる —



特集 新春鼎談

遠くて近いウズベキスタン

～シルクロードでつながる絆～

JANUARY | 1
2023

ベキスタン



What's OISCA

オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立された国際NGOです。現在、41の国と地域にネットワークを持って活動しています。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では、農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。

OISCAという名称の意味

O	rganization	機構
I	ndustrial	産業
S	piritual	精神
C	ultural	文化
A	dvancement	促進

人間の生存に不可欠な“産業・精神・文化”のバランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。

鼎談メンバー

ムクシンクジャ・アブドゥラフモノフ大使

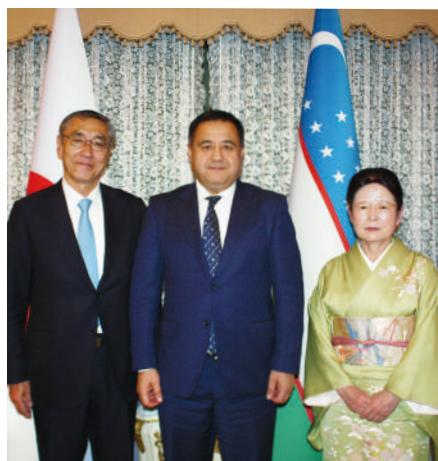
1974年、ウズベキスタン・フェルガナ州に生まれる。タシケント国立経済大学卒業後、アメリカ留学を経て来日。小樽商科大学修士課程および北海道大学博士課程を修了。民間会社勤務後、2006年から08年の間、北海道大学博士研究員を務める。民間会社の社長を経てフェルガナ州副知事、外務省経済外交局対外投資担当部長などを歴任し、21年7月に駐日ウズベキスタン大使として着任。英語、日本語のほか、ロシア語、タジク語、アラビア語なども堪能。落語のテレビ番組を見るのが好きで、休日は家族のために日本料理をふるまうことも。

加藤 文彦

1953年、東京都に生まれる。76年、東京大学経済学部を卒業後、通商産業省（現在の経済産業省）に入省。日本貿易振興機構パリセンター所長、資源エネルギー庁石油部流通課長、通商産業省貿易局貿易保険課長などを経て2002年経済産業省大臣官房付、04年に内閣府大臣官房審議官に就任。民間の保険会社の役員のほか、中小企業庁次長を務め、13年から16年に特命全権大使としてウズベキスタンに赴任。現在、全国石油商業組合連合会副会長・専務理事。

中野 悦子

公益財団法人オイスカ理事長。オイスカ・インターナショナル総裁。



駐日ウズベキスタン大使館（東京都港区）にて

左から
加藤文彦氏、
ムクシンクジャ・アブドゥラフモノフ大使、
中野悦子理事長



新春鼎談

遠くて近いウズ

～シルクロードでつながる絆～



オイスカは2021年からの10年間で、世界で5万haの土地の緑化を行うことを決め、現在、その目標達成に向けた取り組みを各国で進めています。そのうちの4万haは、ウズベキスタンでの沙漠緑化でカバーする予定です。オイスカにとって新しくお付き合いが始まった国、中央アジアに位置するウズベキスタンをより多くの方に身近に感じていただくとともに、同国での活動への理解も深めていただけるよう駐日ウズベキスタン大使ムクシンクジャ・アブドゥラフモノフ閣下と第8代の駐ウズベキスタン日本大使を務められた加藤文彦氏にお話をうかがいました。

ウズベキスタンと日本の関係

中野 本日はお忙しい中、ありがとうございます。私はまだウズベキスタンを訪れたことはないのですが、オイスカ国際活動促進国会議員連盟のメンバーとしてオイスカ活動を支えてくださっていた元参議院議員の中山恭子さんから、大使として同国に赴任していた時のお話をうかがったことがあります。両国の歴史的なつながりについても興味を持っていました。

オイスカは創立から60年以上、アジア太平洋地域で「土から離れない」活動を続けており、持続可能な農業のための技術支援や各国の青年を日本に招聘して行う農業研修などを地道に積み重ねてきました。1980年からは植林も始め、現在は2021年からの10カ年計画に基づき、5万haの緑化に向けた取り組みを進めており、ウズベキスタンではアラル海が干上がった沙漠化している地域で4万haの緑化を目指しています。

本日はまだ見ぬウズベキス

タンが近く感じられるよう、お話を聞かせていただければと思っています。どうぞよろしく願います。

はじめに大使からウズベキスタンについてご紹介いただけますか。

大使 アッサーロームアライクム（イスラム教の挨拶）。はじめにウズベキスタンと日本との外交関係樹立30周年を心よりお祝いしたいと思います。これまでの30年間、私たちは高いレベルの信頼関係を築き、国際舞台において緊密に協力し、支え合ってきました。2019年12月にシャフカット・ミルジョーエフ大統領が初来日を果たしたのは、両国の関係における歴史的出来事であったと思います。政治、貿易、経済、投資、文化、人文分野における協力をさらに発展させるための強い基盤を築くことができました。また、貿易と経済協力の面では、日本は長年ウズベキスタンの主要なパートナーであることをうれしく思います。この30

日本人の目で見た ウズベキスタン

年でエネルギー、特に石油やガス、そして農業などさまざまな分野における重要で大規模なプロジェクトに対し、日本からの投資が誘致され、経済の安定と発展に大きく貢献しています。また近年は、日本の民間投資が流入し始めていて、観光、教育、医療、IT技術、家電製造の分野でウズベキスタンのパートナーとの共同プロジェクトが開始されています。貿易面ではドライフルーツ、ハチミツ、メロン、ブドウなどが日本に輸出されています。

加藤 コロナ禍でストップしていた直行便が再開しているのではないのでしょうか。もっとも、10月から3月の間はとも寒いので、日本からの観光客も少なく、直行便は休止されるのですが、人の往来も戻ってきているのでは？ オイスカの方も11月に現地に行かれたと聞いています。

大使 そうですね。水際対策も緩和されていて、ウズベキスタンを訪れる方の数は増えていると思います。また、18年にウズベキスタン政府が日本人に対するビザを免除し、20年からは、両国の外交旅券

所持者にビザ免除措置が導入されたことも、文化や人文交流の発展に寄与しているように思います。私たちの歴史的なつながりと精神的な価値観は、シルクロードを通じて結び付けられていて、現在の交流の基盤となっています。ウズベキスタンも日本もアジアの国なので、顔が似ています

が、それだけではなく、言葉に関しては文法も似ていますし、似た言葉もいくつかあるんですよ。例えば、「帽子」。頭にかぶるものですよ。ウズベク語で「ボシ」は「頭」を意味します。他にも「お父さん」は「オタ」。

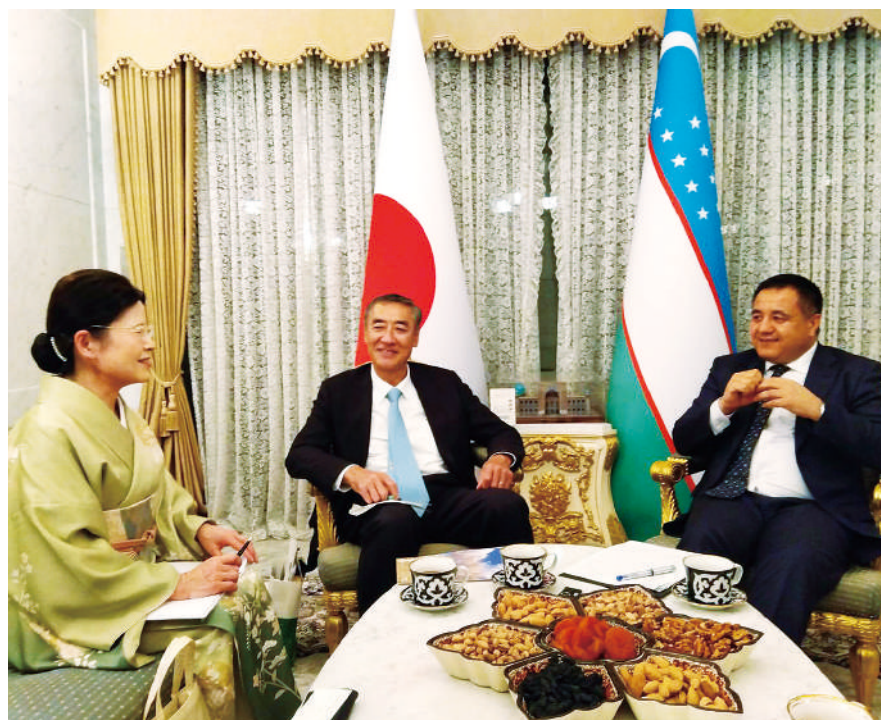
中野 似ている言葉がたくさんあると聞くと親近感が増しますね。加藤さんも大使としてウズベキスタンに赴任中、いろいろな面をご覧になられたと思います。日本人の目から見たウズベキスタンはどのようなお国でしたか？

加藤 先ほど大使から包括的なお話がありました。私は13年から3年半駐在した体験

を踏まえて、少し補足をさせてもらいます。

ウズベキスタンに行つて最初に感じたのは家族や親戚のつながりの強さです。それから同じように近所付き合いも深く、マハラと言われる共同体組織が厳然とあつて、これは行政組織にもなっているのですが、このマハラを基盤として近所の仲間とのつながりがとても大事にされています。日本の昔の近所付き合いのような感じです。ですから、結婚式やお葬式もマハラを単位に行われていて、この中で老人をみんなでいたわり、子どもの面倒もみんなで見えています。開発途上国などでは街なかをぶらぶらしている失業者を見かけることが多いのですが、ウズベキスタンではそうした光景をあまり見ることはありません。これもマハラの中で吸収されているからなんです。ほかに挙げたいのは町がきれいだという点。これもマハラの高齢者が指導しているという側面があるのだと思

います。主婦は毎朝早起きをして家の前の道の掃除をして水を撒き、旦那は洗車するといった具合に、家の周りが高にきれいに保たれていて、ゴミも落ちていません。それから、お客様へのおもてなしですね。今もこうしてテーブルにたくさんドライフルーツやナッツの盛り合わせが、お茶とともに準備されています。が、お客様をお迎えする時は、お金がない家庭でも、ないなりに一所懸命におもてなしを



テーブルには何種類ものドライフルーツとナッツが用意されていた

してくるのを感じました。また、町の印象としては、日本の人口構成と全く違い、若者が多いんです。人口の半分以上が30歳未満の若者ということで活気があり、これからどんどん伸びてゆく国だということを感じます。さらに多くの若者はとても勤勉で能力が非常に高い。本日、同席してくれているナジロフ君（二等書記官 ナジロフ・ジキリ口氏）もそうですが、小さい頃からウズベク語とロシア語



落ち葉の季節でも、タシケント市内の街路樹や緑地の下はいつもきれいに掃き清められていた

の両方を話すんです。先ほど大使もおっしゃられたように、ウズベク語は日本語と文法が似ていて、主語の後に修飾語などが来て最後に動詞といった語順なのに対し、ロシア語は英語と同じ語順で日本語とは全然違うのに、両方を話します。大学で1年ぐらいいしか学んでいないのに、日本語がペラペラだという若者たちにも会いました。真面目で能力が高い若者が多いのも印象的でした。

最後に、日本に対する親近感についてお話しさせてください。戦後にシベリアから移された2万5千人の日本人抑留者がナヴォイ劇場の建設に

関わったことは有名な話ですが、そうしたことが連綿と今につながっているのだと思います。また留学生の受け入れや教育分野での協力では、考古学の分野で長年ウズベキスタンで活躍された加藤九祚先生や、独立前から今に至るまで現地で活動が続けていらっしゃるタシケント国立東洋大学の菅野玲子先生（22年10月20日に76歳で逝去されました。ご冥福をお祈りいたします）のような方の存在は大きいと感じます。教え子が先生方の取り組みを引き継いでいて、名古屋大学や筑波大学をはじめとする日本の大学と、ウズベキスタンの大学との教育分

野における交流にも発展しています。優秀な若者が多く、元気のあるウズベキスタンと日本とが信頼し合って交流を深めている状況だと思っています。

大使 ありがとうございます。日本人だけではなく、海外の人たちが知らないウズベキスタンのことを加藤大使がお話しくださり、うれしく思います。私も大学間交流の推進などに力を入れたと考えていて、大使としての最大の目標は、ウズベキスタンに日本の大学を作ることなんです。

マハラについては、昔の日本も同じようだったとの話を私もよく耳にします。特に70年代以上の日本の方は、ウズベキスタンで、地域のつながりの強さや温かさを体験すると、「日本に帰りたくない」とおっしゃるんです。ご自身が育ってきた社会と似ているのでしょね。

中野 私も70代ですから、お話を聞いているとうらやましく感じます。50年前の日本も共同体がしっかりしていて、みんなが助け合って生きていく社会でした。オイスカの創立者は、それを世界に広げて

いこうと訴えていました。国が違っても、肌の色が違っても、みんな地球上に生きる家族なんだと。だからみんなで助け合っていこうと。海外の困っている家族に手を差し伸べるのは当然という考えで、創立当初から活動をしてきました。今の日本ではそうした助け合いが希薄になっている地域も多いと思いますが、ウズベキスタンではなくしてほしくないですね。

大使 実は、今の大統領も前の大統領もマハラという自治組織のよい面をもっと発展させていこうと取り組んできました。冠婚葬祭から誕生日のお祝いに至るまで、日程はマハラのリーダーに相談して、全員が参加できる日を調整して決めていくんですが、そうしてみんなで助け合って、支え合って社会を築いてきたわけですから、マハラがなくなってしまうたら、ウズベキスタンらしさを失うことにつながると思います。ですから国としても、マハラが存続していくようにサポートしているのです。

中野 日本ではマハラのようなつながりは薄れつつありま

すが、そうした社会のつながりや、先ほど話題になった言葉に至るまで共通点が多いですね。日本とウズベキスタンはアジアの東と西に遠く離れています。不思議な気持ちがあります。

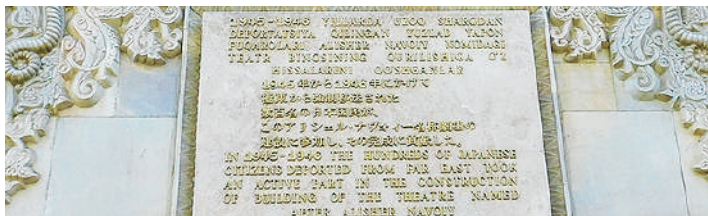
加藤 やはりシルクロードでしよかね。

大使 そう。シルクロード！日本もウズベキスタン同様、おもてなしを大事にする国です。それに日本人は皆さん親切です。どうにかして相手を助けてあげようという気持ち強いと思います。特に外国人が相手だと強い。それはウズベキスタン人も同じで、外国人は家族や親戚が近くにいないと頼れる人がいないだろうから、何か困ったら手伝ってあげようと思っているからです。人間は同じとは言いますが、この「外国人に対しての親切心」という点に関しては、私は欧米の国で感じたことはなく、日本に来てウズベキスタンと同じだと感じました。

中野 先ほどナヴォイ劇場の話が出ましたが、日本の抑留者の方々は、大変な労働の中でウズベキスタンの人に助

けられたという思いが強かったと聞いています。大変厳しい環境下だったはずですが、後世の日本人が笑われないような仕事をしよう、恥じない建物をつくろうと、精一杯働いていた。すると、そうした日本人の姿を見ていたウズベキスタンの人たちが食料を差し入れてくださったそうですね。

大使 第二次世界大戦直後は、ウズベキスタン国内も食糧難に直面していて大変な状況でした。でも、当時のウズベキスタン



上／タシケント市内にあるナヴォイ劇場の壁面には、日本人が建築に参加したことが日本語でも刻まれている

下／1966年に発生した大地震で多くの建物が倒壊する中、ここだけが無傷だったことから日本人の仕事が再評価されることとなった

い仕事ができるのだ」と考えましたし、その仕事の進捗も予想以上のものでしたから、「日本人のように働きなさい」と親は子どもに教えるようになりしました。

中野 そんな風にウズベキスタンの人たちが見てくれていて、日本の人たちもうれしかったと思います。

大使 もちろん抑留はつらいことですが、シベリアやほかの場所ではなく、ウズベキスタンでよかったと思った人は多いと思います。実際亡くなられた人の数も一番少ないのではないのでしょうか。

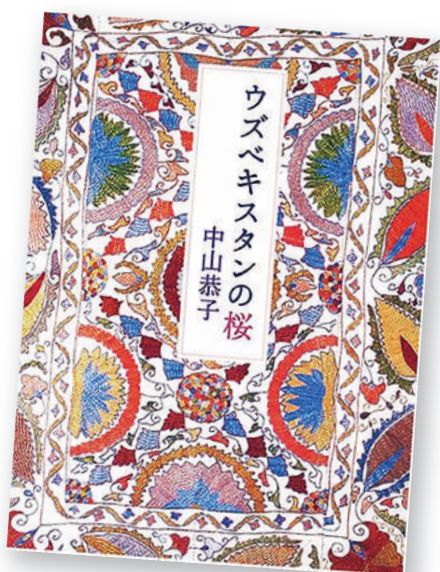
中野 日本人は亡くなった人のお墓をとて大事にします。イスラム・カリモフ初代大統領は、「日本人抑留者墓地で眠っている人たちは捕虜ではない。国づくりに貢献してくれた恩人だ」と言って、丁寧に扱ってくださいたと聞いています。この話を聞いたとき、精神性の面で相通じるものがあるのだと感じました。また、中山恭子さんが『ウズベキスタンの桜』の中で書かれていましたが、抑留者の遺族の方のお一人が、遺骨を持ち帰りたいと思って現地を訪ねて墓

地を見に行ったら、地元の人たちの手で手厚く守られていた。だから「お父さんはここで仲間と一緒に眠るのがいいんだ」と納得して、日本でお墓を建てるために用意していたお金は、お墓参りにウズベキスタンまで来るための旅費にすると話された。そんなエピソードからも、ウズベキスタンの方たちがどれほど日本の抑留者のために力を尽くしてくださってきたかがわかります。

大使 18年にフェルガナ州の副知事を務めていた時、コカンド市にある墓地を訪ねたいという日本人を私が案内することになりました。見学してもらえる状態なのかわからないまま下見に行くと、びっく

りするほどきれいに管理されていました。ここには、日本人だけではなく、ドイツ人もポーランド人も眠っていて、その隣にウズベキスタン人のお墓がありました。誰でもお参りできるように管理されていました。墓守は一人です。この仕事をしているというのですから驚きました。やはり先ほどお話ししたように、外国人のお墓は親戚や家族がすぐにお参りに来ることができないから、自分がしっかり守らなければならない考えなんですね。

中野 ありがとうございます。これも中山恭子さんからお聞きしたことです。タシケントの日本人墓地に眠る人たちのためにサクラを植えた後、



『ウズベキスタンの桜』
中山恭子著／KTC中央出版発行

初めてウズベキスタンに触れる人におすすめ。同国の歴史や文化、日本とのつながりなどがわかりやすく書かれた一冊

しっかりと根付くよう、政府が桜守を配置して、維持してください。日本人の思いに寄り添った配慮を感じ、うれしく思いました。でも、このように両国の人たちが心を通わせてきた史実が広く知られていないことを残念に思います。

大使 今、そうしたものを伝えていくために、日本と共同で映画を作ろうという動きがありますよ。

中野 それはいいことですね。トルコのエルトゥール号遭難事件とその後、両国の友情を描いた映画『海難1890』は、広くその史実を知らしめましたからね。映画の完成が楽しみです。

大使 多くの日本人にとってウズベキスタンはなじみの薄い国かもしれませんが、私たちの友好関係には長い歴史があります。また、日本ウズベキスタン協会や福島県文化経済交流協会、名古屋ウズベキスタン友好協会などは、両国間の文化・教育交流を進展させ、日本におけるウズベキスタンの知名度を上げるために貢献しています。こうした民間での交流がさらに広がって

アラル海での挑戦

いくことを期待しています。

中野 オイスカの創立者は明治20（1899）年の生まれで、子どもの時から日清・日露と続く戦争、大人になってからも大東亜戦争を体験し、戦後生まれの私たちとは違う生き方をしてきました。日本はアジアから信頼される国にならねばならないとの思いが第一にあつて、主に東南アジア地域の農村開発のお手伝いをしてきました。

ご縁があつてウズベキスタンで緑化することになりましたが、これまでお付き合いのなかった国で活動が始まったことに関して、「どうしていきなりウズベキスタン？」と感じる方もいらっしゃるかもしれません。でも、大使とお話しさせていただく中で、改めて思ったことがあります。

戦後の大変な状況の中で、日本人抑留者は、親日的なウズベキスタンの人たちに支えられながら、日本の名誉や誇りにかけてナウオイ劇場を建設し、50年後、100年後の私たちに今なお感動を与えて

くれています。私たちもウズベキスタンの方たちとの信頼関係を築きながら緑化を進め、日本人がこの地から離れても、「かつてここに日本人が来てくれて一緒に植えたんだ」と、地域の人たちが木々を守り続けてくださるようになっています。

加藤 干上がったアラル海が沙漠化しているところには、どんな木を植えるんですか。

中野 乾燥地でも育つサクサウルという木です。この根に漢方薬のもとになる植物を寄生させ、それを育てて、収穫することで地域住民の現金

収入にもつながります。この技術は中国の内モンゴルで続けてきた沙漠緑化プロジェクトで確立したものです。

加藤 もう十分な経験があるのですね。先ほど、日本人墓地にサクラを植えた話が出ましたが、ウズベキスタンにはもともとサクラはありませんから、専門家の方が、土が合うかどうかをとてにも気にしていたと聞きましたし、実際全部根付いたわけではなかった。沙漠ではどんな木を植えるんだらうと気になりました。水分だけではなく、酸性なのかどうかといった土壌の性質が重要ですからね。

大使 サクサウルは沙漠に育つ木ですから大丈夫です。

ウズベキスタン政府も植えてきた木です。

中野 オイスカでは富樫智という林学・土壌学の専門家が主に現場でプロジェクトを担当します。

加藤 富樫さんのことは私も存じ上げています。粘り強く活動が続けていますね。

中野 ええ、ありがとうございます。アラル海の話が出てきたので、改めて大使からアラル海のことを詳しく教えてくださいいただけますか。

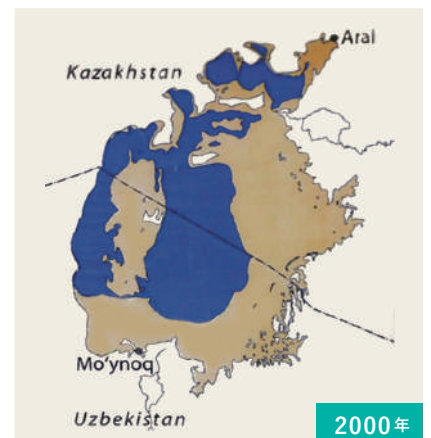
大使 アラル海は、ウズベキスタン北西部とカザフスタン南部の間に位置していて、20世紀後半までは世界で4番目に大きな塩湖でした。アラル海に流れ込む水のほとんどは、アマダリヤ川とシルダリヤ川から流れ込んでいましたが、60年代、当時のソビエト政府がアジアの沙漠地域の農業開発を目的とした灌漑のために、これらの川をアラル海流域から別のところに流すことを決めました。それ以降、アラル海の水位は急激に低下し始めました。14年8月にはNASAの衛星画像によって、アラル海東部が完全に干上がったことが示されました。今では



上／沙漠に育つサクサウル。地面を埋めつくす貝殻は、かつてここが湖底だったことを物語っている

左／植林は、先が尖ったスコップで穴をあけ、そこに苗を入れて足で砂を踏み固めるだけのシンプルな作業

アラル海縮小の変遷



アラル海の面積は60年当時の10分の1以下にまで縮小しています。湖の端から約200kmにおいて、すでに500万haも干上がってしまいました。ここで営まれていた漁業や水産加工業は衰退しましたし、沙漠化が進むことで飲料水の不足、地元住民の健康と生活の悪化など、多くの悪影響をもたらしています。世界のほかの沙漠も同じですが、アラル海の場合も人々の福祉、社会経済の発展、生物多様性と生態系の保全に必要なインフラと社会環境が欠けています。ウズベキスタン政府としても中央アジア諸国や国連機関、そのほかにも国際的なパートナーと協働で、アラル海の問題の緩和のために多くの措置を講じていますが、経済発展と住民の福祉の向上については、さらに緊急度を増して対策する必要があると感じています。

また、アラル海の被害は局地的な問題ではなく、世界的な問題でもあります。近隣諸国に砂が飛んでいるというだけではなく、北極海の氷にもアラル海の砂が付着していることが分かっています。そのような状況下で、シャフカット・ミルジョエフ大統領が推し進める近隣諸国との友好的な外交政策は、アラル海の問題解決と地域住民の生活水準向上のためのそれぞれの国の取り組みを一つにしていくことに寄与しているといえます。

オイスカのような民間の団体が、会員の皆さんと共にアラル海の緑化プロジェクトと、この分野における専門家の育成に取り組んでくださっていることに対し、深く感謝します。このプロジェクトにより、環境状況と地域住民の福祉が大きく改善されるものと確信しています。アラル海の問題は政府と民間の力を合わせた取り組みが必要であること、そして生態系の被害規模は年々拡大しているため、アラル海地域の環境状況を改善するには、包括的な支援が必要であることを改めて強調したいと思います。

ウズベキスタン政府による近年の環境関連の取り組み

■グリーン経済へ移行する国家戦略と再生可能な水素エネルギー開発プログラムがスタート。これにより2030年までにエネルギー効率は2倍に上昇し、再生可能エネルギーの割合は少なくとも25%を達成する。

■アラル海の各種被害の緩和、沿岸地域の発展に対する取り組みに関心を持つパートナーとの協働を目的として、「グリーンエネルギーに関するハイレベル国際フォーラム」を本年ヌクスで開催することを国連に提案。昨年5月の国連総会で承認された「アラル海域を環境革新と技術のゾーンとして宣言する」旨の特別決議を実現する上で重要なものとして期待されている。

■21年に行われた国連気候変動枠組み条約第26回締約国会議（COP26）において、30年までに、GDP単位当たりの温室効果ガス排出量を10年比で35%削減するとの約束を追加。

■22年10月、タシケントで開催された第16回日本ウズベキスタン経済合同会議にて、両国政府の間で、2国間クレジット制度の（Joint Crediting Mechanism/JCM）の構築に関する協力の覚書への署名がなされた。また、ウズベキスタン環境庁と日本の環境省の間で環境保護分野における協力の覚書も交わされ、協力構築への大きな足掛かりとなった。

日本の対ウズベキスタン支援

加藤 私が大使として赴任中に見たエネルギーや環境に関する問題点についてお話しすると、残念なことにウズベキスタンでは、まだ電力不足が深刻なんです。冬に電気が止まり、暖房が使えないといった状況がありました。

中野 ウズベキスタンでは電気エネルギーを輸出しているのではなかったでしょうか。

大使 実は、アフガニスタンやキルギスタンなどと電力供給に関する契約を結んでいるため、自国が困っても電力を輸出しなければいけないという事情があるんです。

加藤 10年ぐらい前、私が着任してすぐに大統領にお目にかかった時、とにかく電力の問題を何とかしたいとおっしゃられました。高いレベルでの経済発展を目指すウズベキスタンにとって電力供給は欠かせないものですが、一日のうち半分ぐらい停電することもある日常的になっている中、安くて効率的に、かつ環境に負荷の少ない電力供給を目指し

たいとお話でした。何とか貢献したいと考え、円借款事業として、450 MW（メガワット）の非常に効率のいい発電所を3基ほど導入することができました。これは対ウズベキスタン円借款事業としては最大のものになり、国民の皆さんの生活向上に貢献できたのではないかと思います。また、もともと海外から輸入していた低品質の石炭を使っていた火力発電所に、高効率のガスタービンを導入したことで、二酸化炭素排出の削減にもなり、気候変動対策にもつながったものと考えます。それからアラル海の問題に

関連したことです。もともとはシルダリヤ川とアムダリヤ川からの水が流れ込んでいたのが、綿花栽培のための灌漑が原因で水が行かなくなり、干上がってしまったわけですね。その灌漑用のポンプも質が悪いものが多く、すぐに壊れるという問題を抱えていました。それを日本製の高品質のポンプに替えることにも円借款で取り組みました。その結果、効率的に水を使えるようになり、以前より多くの水がアラル海に流れ込むようになったと考えています。日本政府として直接アラル海の沙漠化に対して支援をしてきたわけではありませんが、こうした円借款による支援事業により間接的に関わってきました。また、日本が主導して国

オイスカの取り組み

連に設置した「国連人間の安全保障基金を通じたアラル海の自然災害による影響を受けたコミュニティの強靱化」プロジェクトに200万ドルの支援をしていますので、プロジェクトを通じてアラル海沿岸地域への貢献をしてきたといえると思います。

中野 オイスカは民間の組織で、国家間の支援のような大きな貢献はできません。たった4万haですが、オイスカにとっては大きな挑戦です。NGOらしくウズベキスタンの皆さまとの関係を築いていくという思いで、アラル海の問題に挑んでいきたいと考えます。その一つが、研修生の受け入れです。今年度は、初めてウズベキスタンの青年を農業研修生として日本に招聘しました。彼はコーディネーターとして現地での活動を

※アラル海の沙漠化により、食料や安全な水の不足、雇用喪失、砂塵による健康悪化といった深刻な影響を受けているウズベキスタン北西部地域の脆弱なコミュニティを対象に実施されたもの。

担うわけですが、帰国前に乾燥地造林の研修の位置づけで「海岸林再生プロジェクト」を訪問しました。このプロジェクトは、東日本大震災の際に津波で流されてしまった海岸の松林を再生させようとオイスカが主導して、全国の皆さまからのご支援をいただきながら、また、被災された農家の方たちの技術を生かしながら100haの海岸林の再生を進めているものです。全長5km、幅200mの松林を目にした彼は「100haの森がこんなに大きいのに、私がいから取り組むのは4万ha。想像がつかないし、本当にできるのだろうか」と不安を口にしていました。若い彼が安心してプロジェクトを進められるよう、日本からもできる限りのサポートをすると約束をしています。

加藤 4万haってすごい広さですよ。

大使 実は私も21年12月にアラル海の入りのムイナクという場所に初めて行きました。目の前に広がる沙漠にさび付



川の近くなど水が確保できる地域では今も綿花栽培が盛ん



アラル海の入り口ムイナクにある「船の墓場」。この先に広大な沙漠が広がっている

いた船がある「船の墓場」と言われる場所を見て、前はここまで海だったということがどうしてもイメージできませんでした。塩が浮き出てきている足元の砂が風で飛んで健康に害を及ぼしているということや、新生児が長く生きられない地域もあると耳にしています。先ほども話した通り、もはやウズベキスタンだけの問題ではなくなっています。私がフェルガナ州の副知事を務めていた時、政府も170万haにサクサウルなどを植えてグリーンゾーンを作りました。アラル海周辺の住民だけではなく、全国から人が集まって、必要な車両や機械な

どの供与をしながら、みんなの力で取り組んだのを覚えています。最初にトラクターで土を耕し、飛行機で播種しました。本当に大きな仕事で、お金も相当費やしましたが、それはウズベキスタンの未来のためです。そして、全世界の未来のためです。1、2年後、しっかりと縁が根付いてきて地域も変化してきました。先ほどたったの4万haとおっしゃいましたが、面積の問題ではありません。日本の民間の団体がこうして取り組んでくださることで、それを見た多くの国の人たちが、「自分たちも世界の未来のためにやってみよう」と思ってくれるこ

とが大事なのです。それぞれが小さな面積でもいいんです。各国の皆さんが、アラル海が直面している問題がウズベキスタンだけのものではなく、世界の問題だと認識して取り組むことが必要です。だからしっかりとに向けてアピールしていくことも大事になってきます。今、サクサウールの植林についてはドイツ政府が支援しているところがあると聞いていますが、外国のNGOの支援によるプロジェクトは初めてだと思っています。

中野 緑化にとどまらず、漢方薬の原料となるニクジュウの栽培もしながら地域住民の生計向上も目指していきたいと考えています。それに先ほど大使がおっしゃっていたように、新生児の死亡率が高いといった課題の解決にもつながったらと願っています。**加藤** プロジェクトの実施のためにはお金も相当かかると思いますが、どのように調達するのですか。**中野** それが課題です(笑)。募金も呼びかけなければなりません。もちろんさまざまなかもありません。助成金なども活用する予定ですが、オイスカは全国

に13の支部があり、会員の皆さんが活動を支えてくださっています。いくつかの支部からはアラル海の緑化を応援したいとの声があがっています。また、愛知県支部の会長さんが沙漠緑化を支援するNPOを立ち上げていて、富樫が進めてきた内モンゴルでの活動の支援にはじまり、ウズベキスタンでの取り組みも応援してください。もう5回もツアーを派遣して、多くの方が現場での体験もしています。こうした支援の輪を全国に広げたいと、本部のスタッフ、来年度あるいは再来年度、日本からチャーター便を飛ばして、全国の会員さんにツアーに参加してもらおうと考えているようです。

大使 ぜひそうしてください。協力します。それに、私はいろいろな自治体に招かれて講演をするのですが、主に経済、人材、観光の話をしています。これからはそこにアラル海の話も加えて、オイスカの取り組みを伝えていきたいと思います。数は少ないかもしれませんが、共感してくださる方が出てくるように力添えをさせてもらいます。**中野** ありがとうございます。ツアーは実現するかわかりませんが、植林に参加するといっただけではなく、古きよき日本が残っているウズベキスタンの風土に触れることで、本来の日本を取り戻すことにもなるかもしれません。**大使** 私の知り合いの社長さんの会社には、ウズベキスタン人がいて、そうした縁もあり、その方は何度もウズベキスタンを訪問しているのですが、どんどんウズベキスタンが好きになって、とうとう投資をして会社まで作っていました。もちろんビジネスではありませんが、それを通じてウズベキスタンのために貢献したいという思いからです。**中野** そういう意味では、オイスカはウズベキスタンの経済発展に寄与することはできませんが、緑化を通じて友好を深め、見えない財産を築いていきたいです。本日はウズベキスタンの皆さんのお人柄や文化、習慣などの面でも相通ずるものをたくさん感じることができてうれしく思いました。貴重なお話をお聞かせくださり、どうもありがとうございます。



カラカルパクスタン農業大学の教職員らと実施した現地調査

REPORT

ウズベキスタン沙漠緑化プロジェクトの展望

昨年11月26日に実施した「地球環境を考えるトークイベント2022冬」(13ページにて報告)では、「世界を幸せにする『緑化』成功への秘訣」をテーマに、コメンテーターとして、OISCA College 所属で沙漠緑化専門家の富樫智氏と海外事業部調査研究担当の長宏行部長が、ウズベキスタン沙漠緑化プロジェクトを主な事例としながら、各国でオイスカが取り組む緑化活動について紹介しました。

2人はイベントを前にウズベキスタンに行き、現地の状況を調査し、「ウズベキスタン沙漠緑化プロジェクト」の今後の方針について関係各所と調整を進めたうえで、計画を練り直す作業を進めてきました。

その中で改めて確認されたのは、次の点です。

薬用植物による緑化

アラル海の沙漠緑化では、サクサウールの植林のみならず、薬用植物などの植栽も積極的に行う必要があることが分かった。特に塩害がひどく、サクサウールが根付きにくいエリアでは、先行して土壌改良を行うことで、段階的にサクサウールを植えることができるものと思われる。今回の調査では、沙漠に自生する薬用植物が20種類ほど確認されており、これらを条件に合わせて植栽していく。

地元林業局との連携

オイスカは4万haを緑化すると目標を掲げているが、実際には緑化が必要なアラル海の沙漠面積は540万haであることを鑑み、現地でそれを担っている林業局との連携をさらに深め、技術支援や機材提供などにより、効率的にアラル海全体の緑化が進められるように協力する方針を固めた。

今回の現地調査を踏まえてトークイベントに臨んだ長部長は、オイスカの緑化プロジェクトの3つの特長として

「長期継続性」「住民の巻き込み」「技術と知見」を掲げ、アジア太平洋地域でこれまで進



左から長部長、富樫氏、太田氏

めてきたプロジェクトは10年、20年といった長期スパンで、住民と共に取り組んできたものであり、ウズベキスタンでの活動も同様に、長期間にわたって進めていく覚悟であることを強調しました。

また、約20年間にわたり専門家として富樫氏が中国・内モンゴルオイスカアラ善沙漠生態研究研修センターで積み上げてきた研究成果や沙漠緑化の経験を、ウズベキスタンにおいても十分に活かしつつ、さらに現地カウンタートであるカラカルパクスタン農業大学との協力のもと、新たな研究を続けていくことで、アラル海の沙漠緑化に貢献できるとの考えも示しました。

富樫氏は、内モンゴルで確立した技術をもとに、ほぼ同



2021年の植栽地。熱帯地域で見られる苗木の成長を想像すると、ここは枯れ草が生える荒れ地にしか見えないが、これでもサクサウールが約60%の割合で根付いているという。逆に全く根付かなかったエリアもあり、そうしたところでは薬用植物の栽培を試みることになる

緯度で似たような問題を抱える場所でも沙漠緑化に貢献したいの思いからウズベキスタン入りした経緯を報告。

また、この2つの場所は年間降水量もほぼ同じであるものの、アラル海の場合は秋から冬にかけての降雨が多く、蒸散量が少ないことから、内モンゴルよりも植林が成功する条件が整っているとの明るい話題も提供しました。

広大で厳しい自然環境下の緑化は、一組織でできるものではなく、会員の皆さまの資金および技術支援、各国の研修生OB・OGの参画、大学との共同研究や林業局との連携など、さまざまな人々、機関からのご協力をいただながら、覚悟をもって進めてまいります。

国内 山梨県の自然の恵みで健やかに 地域の活性化につながる 循環型プログラム始動

2022年11月12・13日、

オイスカが事務局を務めるやまなし水源地域ブランド推進協議会（以下、協議会）と、株式会社トラボの共催で「みずともりフォレストトリート@南アルプスはやかわ」が実施されました。これは、協議会の企画メンバーである山梨県早川町において、同町の豊かな自然を満喫しながら、実践を通して林業や森の恵みについて学び、体験するプログラムです。また、宿泊や移動など、多方面から地域の参画を得ることによって、早川町の魅力発信や価値の再発見、創造を図り、森の恵みの活用



早川町森林組合の協力を得て間伐体験も実施

の幅を広げるとともに、参加者、町それぞれのメリットにつなげるねらいもあります。初めての試みとなる今回は9名が参加し、2日間にわた



講師の(株)トラボの村上志緒代表から、スギやモミなどを活用したパームづくりも学んだ

り森林散策や林業体験を実施。南アルプスの山々に囲まれた早川町の自然の特色を味わうとともに、日本の森林は必要な間伐が適切に行われておらず、材の利用促進の面でも課題を抱えている実情などを学びました。また、採取した枝葉からアロマ効果のある香りを抽出する蒸留体験などを行い、森の恵みを楽しみました。参加者からは「五感で自然を体験でき、この経験を与えてくれた早川町をもっと応援したい気持ちになった」といった声が聞かれました。

今後、さらに内容を調整、発展させ、これからも継続してプログラムを実施していく予定です。

海外 インドネシア・スカブミ県N連プロジェクト コミュニティと連携し 環境整備が着々と進む

日本NGO連携無償資金協力で実施するインドネシア・スカブミ県での「伝統的生活様式を守って生活する共同体の生活基盤の整備と生活環境の改善、生計向上の支援事業」は3年計画の最終年次を迎え、22年8月の開始から、

ほぼ計画通り進められていきます。灌漑施設整備による米や野菜などの増産が軌道に乗り始め、リサイクル事業も住民

の理解を得て回収量が伸びており、地域内の環境整備に貢献しています。

当初はコロナ禍で事業休止期間があったものの、灌漑水路の修復や生産物の販売などに活用されるショールーム建設といったハード面の充実はほぼ終了し、今後予定されている浄化槽の付帯する共同水場の整備の完成により、地域の衛生面での改善に寄与する



3年次の事業で完成した共同水場

ことが見込まれています。今年度は参加住民らの日本への視察研修も予定されており、日本の山間部など、現地と似た環境での有用な技術を習得することへの期待が高まっています。

国内 四国支部 第28回オイスカ四国のつどい オイスカの活動の意義を再確認

22年10月21日、約160名の会員、支援者の参加を得て、オイスカ四国のつどいが開催されました。この行事は、会員同士が顔を合わせ、四国研修センター（以下、センター）で学ぶ研修生との交流を楽しむなど、年に一度の恒例とな

っていました。コロナ禍で開催が見送られていました。今回は3年ぶりの開催とあって、再会を喜びお互いの近況

を伝え合う様子が見られました。

式典では、継続会員への表彰に続き、公益財団法人オイスカの中野悦子理事長による講話が行われ、60年のオイスカの歴史を振り返り、「これまでの取り組みは、SDGsの実践の積み重ねといえる」と話し、21年に策定した10カ年計画についても説明し、理解と協力を求めました。

集いには、昨年の4月からセンターで研修に励んでいる5カ国9名の研修生も参加。母国の歌や踊りを披露した後、参加者の皆さんも加わって、会場全体で輪になって踊りを楽しみました。

今回が着任後初めてのつどいだったという崔榮晋事務局次長は「コロナ禍前は500人も集まるような行事だったと聞いていた。企画をする中で不安もあったが、参加された皆さんの満足そうな顔を見てほっとした」と感想を話しました。



国内 オイスカ開発教育専門学校 ウクライナ避難学生教育支援 クラウドファンディング目標達成！

22年7月よりウクライナ避難民の女性を学生として受け入れ、日本社会への適応力の養成や就労支援を行ってきたオイスカ開発教育専門学校（静岡県浜松市）では、さらなる学生の受け入れや支援の充実を目指すため学内にウクライナ学生支援チームを立ち上げ、同9月から11月末にかけてクラウドファンディングを実施。11月初旬には目標としていた240万円を達成し、終了までに306万円の支援が集まりました。

同校にとってクラウドファンディングの試みは今回が初



10月に迎えた2名の歓迎会

めてのこと。寄附ページの実際にはじまり、TwitterやFacebookなどのSNSを活用したこまめな情報発信に努めながらの、手探りのスタートだったといえます。学生支援チームのメンバーは「経験も知識もない中で、オイスカ本部にアドバイスをもらいながら、無我夢中でやってきた。愛知県支部をはじめとする全国の支部、会員の皆さまからもらった心から感謝している」と、クラウドファンディングを通じて支援者との貴重なつながりを得ることができたと話しています。

同校では、昨年10月に2名、12月に1名を新たに受け入れており、現在4名が日本での自立のため、日本語学習などに励んでいます。今後も同様の受け入れを継続していく予定です。

国際協力科の学生がウクライナ学生の様子を伝える動画を作成し、YouTubeで公開しています。ぜひご視聴ください！



国内 地球環境を考えるトークイベント2022冬 世界を幸せにする緑化とは オイスカの森づくりを振り返る

22年11月26日、埼玉県にて「世界を幸せにする『緑化』成功への秘訣」をテーマに、「地球環境を考えるトークイベント2022冬」を開催。東京大学名誉教授の太田猛彦氏、沙漠緑化専門家の富樫智氏、海外事業部の長宏行部長をコメンテーターに迎え、当日はオンラインを含め、215名が参加しました。

22年11月26日、埼玉県にて「世界を幸せにする『緑化』成功への秘訣」をテーマに、「地球環境を考えるトークイベント2022冬」を開催。東京大学名誉教授の太田猛彦氏、沙漠緑化専門家の富樫智氏、海外事業部の長宏行部長をコメンテーターに迎え、当日はオンラインを含め、215名が参加しました。

年から取り組んできた内モンゴルでの事例をはじめ、インドネシアやタイなどでの緑化活動を振り返り、オイスカの森づくりに共通する3つのキーワード（長期継続性、住民の巻き込み、技術と知見）を提示。創立以来オイスカが培ってきた緑化や人材育成などのノウハウを活かした住民と共に取り組む持続可能な森づくりについて話し合われました。

国内 西日本研修センター 収穫感謝祭・秋 地域と一体となり盛大に開催

22年11月12日、西日本研修センターにおいて収穫感謝祭・秋（以下、収穫祭）が開催されました。収穫祭は、毎年地域の方々と実行委員会を立ち上げ、協力しながら実施しているもので、今年も準備のため前日から実行委員をはじめ、多くのボランティアが駆けつけました。

当日は1500名を超える来場者で大賑わい。センターの新鮮な農産物や、大相撲九州場所の宿舎としてセンターに滞在していた高田川部屋によるちゃんこ鍋のほか、地元脇山地区のお米を使ったジェラートなど、地元ならではの店も充実しました。また、ステージ発表では地域のグループによる歌や太鼓、フラダンスが披露され、研修生も出身国の紹介やダンスを行い、会場を盛り上げました。



前日の準備の様子。イベント最後の餅まき用に4000個の餅を用意した

年に一度の一大イベントの開催を通して地域とのつながりをさらに深めるとともに、研修生にとっても多くの方々と交流できる実りある一日となりました。

オイスカ冬募金 28日まで受け付け中

現在、2022オイスカ冬募金を展開しています。国内外でオイスカが取り組む事業全体への支援となります。12月14日までに256名の方にご協力いただきました。目標額の800万円まであと360万円となりました。引き続きご支援よろしくお願いします。

専用サイトでは、各地で抱えている問題をお伝えするとともに、その解決を目指し、「住み続けられる未来」のために挑戦を続けるオイスカスタッフらの取り組みを紹介しています。動画も順次公開中です。ぜひご覧ください。

動画公開中
ご覧ください！



2022オイスカ冬募金 ご協力をお願い (募集期間：11月12日～1月28日)



「人」からはじまる、 住み続けられる未来。



大阪マラソン2023 チャリティランナーを 応援してください！

みんなでかける虹。



CHARITY

2月26日(日)に開催される大阪マラソンには、オイスカの活動を応援するためにフルマソンに挑戦するチャリティランナー34名が出場します。そのうち20名は、前回大会にエントリーしていた皆さん。開催直前に一般ランナーの出場中止が決定されたことで、今回の大会への出場となりました。

当日の応援はもちろんですが、チャリティランナーへの寄附での応援もできます。寄附金は大阪マラソンチャリティ事務局を通じて、オイスカが進める「海岸林再生プロジェクト」への支援となります。ご協力よろしくお願いします。

オイスカチャリティランナーへの
寄附はこちらから



「読者プレゼント！」

防災イラストカレンダー 「ボンジュール防災」

「海岸林再生プロジェクト」が進む宮城県名取市閑上地区出身のイラストレーターico.さんが制作された「防災」をテーマにしたカレンダー。

プロジェクトのパンフレットなどのイラストも手掛けてくださったico.さんは、イラストレーターとして活躍する傍ら、自身が被災した体験から防災士としても精力的に活動しており、「防災って大事なのはわかるけれど何をすればいいのかわからない」と感じている方向けにと、防災の入門情報を、温かみのあるイラストとともに紹介するカレンダーを制作されました。使い勝手のよい卓上タイプで、1年を通じて、知らず知らずのうちに防災の知識が蓄積されていく防災イラストカレンダーとなる



ico.'s 2023 charity calendar

Bonjour Bouzai

ボンジュール防災



※ico.さんには、本誌3月号で、ご自身の体験や現在取り組んでいる活動についてご紹介いただく予定です。

■応募方法／はがきかメールに住所、氏名、電話番号、今月号の感想、「1月号読者プレゼント」を明記の上、左の宛先までお送りください。1月末日締切ります。

〒168-0063
東京都杉並区和泉2-17-5
公益財団法人オイスカ
「OISCA」編集部
E-mail oisca@oisca.org

ついています。3名の方にプレゼントします。

ご支援ありがとうございます！

新会員の紹介

新しく会員になられた方は次の通り。
(2022年10月2日～11月11日までの間、本部登録済分。順不同、敬称略)

■維持法人

【愛知県】株式会社ダイバーシティ・ジャパン／株式会社マンダイ
デライト／大新運輸有限公司／株式会社藤恵／株式会社未来サポート【大阪府】プリモアキア株式会社【福岡県】株式会社ファブコン九州

■維持個人

【静岡県】中根信一郎【愛知県】竹内靖／堀田将司／高橋信雄／宮口守廣【香川県】國木健司

寄附

2022年10月1日～11月30日までにいただいた寄附は次の通り。
(順不同、敬称略)

●日本ヒューレット・パッカート
合同会社／海外開発協力事業に
480万円

●UAゼンセン／「海岸林再生プロジェクト」に200万円

●エプソン販売株式会社／海外開発協力事業に180万円

●九州電力生活協同組合／人材育成事業と海外開発協力事業に合せて100万円

●四国電力総連／「子供の森」計画に30万円

●全国化学労働組合総連合／「海岸林再生プロジェクト」に20万7000円

●株式会社Hacoa／「子供の森」計画に15万1250円

●トヨタモビリティパーツ株式会社
社宮城支社／「海岸林再生プロジェクト」に13万4089円

●オイスカ大垣推進協議会／海外開発協力事業に10万円

●仙台トヨベット株式会社／「海岸林再生プロジェクト」に32万6175円

●コスモ石油エコカード基金／海外開発協力事業に503万3109円

●マレリ株式会社／海外開発協力事業と「子供の森」計画に合せて150万円

●テルモ株式会社／「子供の森」計画と「海岸林再生プロジェクト」に合せて30万円

●生興株式会社／「子供の森」計画に15万5000円

●雨谷麻世(東京都)／「子供の森」計画に10万円

●山中勲(愛知県)／人材育成事業に10万円

●リタ・マークス株式会社／海外開発協力事業に22万5300円

●auエネルギー&ライフ株式会社／啓発普及事業と「子供の森」計画に12万7970円

2022オイスカ冬募金

2022年11月12日～11月30日までに「2022オイスカ冬募金」にいただいた寄附(10万円以上)は次の通り。(順不同、敬称略)

●オイスカ国際活動促進国会議員連盟／31万3942円

●八十川紀夫(香川県)／30万円

●久和進(富山県)／10万円

●松井徳之進(静岡県)／10万円

●田中修司(香川県)／10万円

●一般財団法人タイム技研社会貢献委員会／10万円

編集後記

海外での楽しみの一つは食文化に触れること。鼎談の一週間後、ウズベキスタン入りして視察や調査、植林をしながらおいしいものも堪能してきました。帰国後もあの味が恋しく、都内のウズベキスタン料理屋巡りをしたいと思っていますところ。写真は日本のうどんのような麺料理「ラグマン」。(林)



次号予告

OISCA
MARCH 3
2023

《TOPIC》
防災士に学ぶ
震災への備え(仮)

OISCA 1月号 定価160円
発行人／中野悦子
発行所／公益財団法人オイスカ
〒168-0063 東京都杉並区和泉2丁目17番5号
TEL (03) 3322-5161 FAX (03) 3324-7111
E-mail oisca@oisca.org
編集：OISCA／林久美子 倉本有沙
アートディレクション／土肥幹人
デザイン／土肥幹人 坂巻貴行
印刷・製本／株式会社ケープリント

本誌掲載の記事・写真・イラストなどの無断転載を禁じます。



シルクロードに栄えたオアシス都市のひとつだというヒヴァ。今に残る街全体が世界遺産に登録されている。イスラム様式の建築物や装飾が美しく、国内外から多くの観光客が訪れる。
(ウズベキスタン)

今月の表紙写真

Photo by Satoshi Togashi



理念

—— 人と育む、地球といきる ——

Vision

実現したい未来

人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、自然と調和して生きる世界

Mission

日々果たすべき使命・存在意義

私たちは、すべてのいのちが健やかに守られるよう、感謝の心を持つ「人」を育み、いのちの土台となる森づくりや、共に助け合う社会づくりに取り組みます

Value

私たちが大切にしていること

- 互いを理解し尊重
- 土から離れない
- 感謝の心を持ち、へこたれない「人」を育む
- 地域に根差し、住民の「良くしたい」を尊重

Spirit

Visionを達成するために、
私たち一人ひとりが
日々実践する心のあり方

- 先を展望する想像力を持つ
- 着実に一步步積み重ねる
- 仲間とともにチーム力を発揮する
- 挑戦し続ける
- 感謝の心を持つ
- へこたれない
- 経験から学び進化する
- 真摯である
- 人間味にあふれ、楽しみながら！

公益財団法人オイスカ

オイスカは、会員・支援者の皆さまからの会費や寄附金によって運営されています。「公益法人」としての認定を受けているため、所得税・法人税・相続税、また、条例で定められた自治体では住民税も控除対象となります。受領書をお届けしますので、申告の際にご利用ください。

● 特別会員（年額1口） 法人／10万円 個人／5万円

● 維持会員（年額1口） 法人／4万円 個人／2万円

● マンスリーサポーター 個人／月々2,000円～

※特別会員と維持会員には、会員としての差異はなく、口数とともに、自由にお選びください。

※会員、マンスリーサポーターの皆さまには、広報誌「OISCA」をお届けします。

※新入会年度は、入会月によって納入金額が異なります。

● 「子供の森」計画支援金（年額1口） 個人・法人／5,000円

※海外の支援地域の活動案内（年1回）やニュースレター（年2回）をお届けします。

※子どもたちからのグリーティングカード（年1回）が届きます。

ウェブからも支援のお申し込みができます ▶ <https://oisca.org/>

お問い合わせや資料請求のお申し込みは

公益財団法人
オイスカ〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5
☎ (03) 3322-5161 ☎ (03) 3324-7111
E-mail oisca@oisca.org
<https://oisca.org/>

国内研修センター

中部日本研修センター 〒470-0328 愛知県豊田市勤八町勤八27-56 ☎0565-42-1101 ☎0565-42-1103
関西研修センター 〒563-0101 大阪府豊能郡豊能町吉川120 ☎072-738-3699 ☎072-738-3901
四国研修センター 〒761-2103 香川県綾歌郡綾川町陶5179-1 ☎087-876-3333 ☎087-876-3334
西日本研修センター 〒811-1112 福岡県福岡市早良区小笠木678-1 ☎092-803-0311 ☎092-803-0322

国内支部

北海道支部 〒062-0931 札幌市豊平区平岸1条1丁目8-8 ラルス生活研究センター1F ☎011-867-9684 ☎011-867-9685
宮城県支部 〒980-0014 仙台市青葉区本町2-10-28 カメイ仙台グリーンシティビル6F ☎022-265-3350 ☎022-265-3350
首都圏支部 〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5 (公財) オイスカ内 ☎03-3322-5161 ☎03-3324-7111
山梨県支部 〒400-0016 甲府市武田1-2-5 3F ☎055-267-5951 ☎055-267-5951
長野県支部 〒380-0838 長野市東町584 長野県経営者協会総務部内 ☎026-235-3522 ☎026-235-3529
富山県支部 〒939-2226 富山市下夕林280-3 ☎076-468-7120 ☎076-468-7128
静岡県支部 〒431-1115 浜松市西区和地町5815 ☎053-401-3980 ☎053-401-3981
愛知県支部 〒470-0328 豊田市勤八町勤八27-56 オイスカ中部日本研修センター内 ☎0565-42-1162 ☎0565-42-1103
岐阜県支部 〒503-8603 岐阜県大垣市久徳町100番地 太平洋工業園本社内 ☎0584-47-9420 ☎0584-47-9419
関西支部 〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町4-4-1 新御堂ビル ☎06-6244-2366 ☎06-6244-9422
広島県支部 〒730-0041 広島市中区小町4-33 関エネルギアL&B/バートナース内 ☎082-242-7804 ☎082-242-4706
四国支部 〒761-2103 香川県綾歌郡綾川町陶5179-1 オイスカ四国研修センター内 ☎087-876-3333 ☎087-876-3334
西日本支部 〒811-1112 福岡市早良区小笠木678-1 オイスカ西日本研修センター内 ☎092-803-0311 ☎092-803-0322

OISCA NETWORK

福 島 〒963-0534 郡山市日和町字大塚50-8 (南根本産業内) ☎024-958-2643 ☎024-958-3741
茨 城 〒311-0113 那珂市中台852-9 ☎029-298-2539 ☎029-298-2539
神奈川 〒231-0003 横浜市中区北仲通3-33 関内フューチャーセンター内 ☎080-5016-2584
三 重 〒510-0958 三重県四日市市小吉曾1-1-7 中村建設内 ☎059-345-1101 ☎059-345-0745
京 都 〒630-8444 奈良市今市町53-6 ☎0742-63-6277 ☎0742-63-6277
岡 山 〒700-0011 岡山市北区学南町2-6-11 PORTA美容室内 ☎086-252-3027 ☎086-252-3027
徳 島 〒770-8555 徳島市寺島本町東2-29 四国電力徳島支店総務課内 ☎088-656-4593 ☎088-656-4511
愛 媛 〒790-0924 松山市南久米町乙24-84 ☎070-8524-0349 ☎089-948-8682
高 知 〒780-0870 高知市本町1-6-24 高知商工会議所総務企画部内 ☎088-875-1177 ☎088-873-0572
佐 賀 〒840-0826 佐賀市白土2-1-12-4F ☎0952-28-1368 ☎0952-28-1368
長 崎 〒858-0908 佐世保市光町109 関内組内 ☎0956-47-2127 ☎0956-48-5069
熊 本 〒865-0055 玉名市大浜町2173-1 丸光グループ本社内 ☎0968-76-2161 ☎0968-76-2162
大 分 〒870-0002 大分市浜の市1-3-7 榎大地企画内 ☎097-533-2101 ☎097-533-5040
宮 崎 〒880-0843 宮崎市下原町227-6 ☎0985-26-5673 ☎0985-26-5673
鹿児島 〒892-0817 鹿児島市小川町15-1 (南日本総合サービス内) ☎099-224-3833
沖 縄 〒902-0077 沖縄県那覇市長田2-12-9 セレクション長田101 ☎098-943-2871 ☎098-943-2881